

2.9 機械化を前提とした間伐方法

1. 試験担当者

本場造林部造林第二研究室 蜂 屋 欣 二 ほか
北海道支場造林部造林第二研究室 飯 盛 功 ほか

2. 試験目的

間伐事業の省力化、間伐経費を軽減し、間伐をより広く実行するため機械力の導入も考えられる。その前提として間伐方法の検討を必要とするが、当面、初期間伐における列状間伐法について検討したい。

また、列植、果樹えなど機械導入を考えた林分の間伐方法もあわせて検討する。

3. 昭和44年度の経過とえられた結果

○ 本 場

44年度には 東京営林署管内でヒノキ林に間伐試験地を設定

内容は 1. 植列、2列保残、1列間伐の列状間伐

(間伐率は本数材積とも33%)

2. 無間伐(対照区)

3. 材積33%間伐(柱材用を目標として、この林分の平均直径にあたる15cm前後の個体を主体に間伐)

4. 本数33%間伐(従来のB種間伐に準ずる)

○ 北海道支場

帯広営林局中標津営林署管内間伐予定林分について試験地設定のための概査をおこなった。

定山溪営林署管内カラマツ列状間伐跡地において庇陰下のトドマツ生長予測のための資料の収集をおこなった。

4. 昭和45年度の試験計画

○ 本 場

・ 前橋(あるいは長野)局管内、カラマツ造林地に列状間伐試験地の選定

・ 東京営林署ヒノキ試験地の生産構造調査

○ 列状間伐事例調査

○ 北海道支場

中標津営林署管内カラマツ間伐予定林分に列間伐をいろいろ変えた間伐試験地を設定し、その後の推移を調査する。

定山溪営林署管内のカラマツ列状間伐跡地で林冠の開鎖具合と林内照度の推移ならびに樹下植栽されたトドマツの生長との関連を求める。